

「小学校で一番の…」

「お父さん、小学校の一番の思い出って何なん？」現役小学校 2 年生の息子に訊かれてドキッとした高野です。

昔、あるセミナーで似たような質問を受けたことがあったので答えることができましたが、皆様はどうでしょうか？

それは 4 年生の夏。学年全体での水泳大会のことです。僕の通ってた学校では 25 メートルを泳げば合格なのですが、出来る人は 100 メートル泳いでも良いよという変わったルールでした。

当時はスイミングスクールに通ってる子も少なく、僕が知る限り学年で一人。シノハラ君だけだったと記憶しています。

僕はというと「市政だより」に載っていた子ども水泳教室に親が応募して当選。数回通っただけの超我流クロール。今にも溺れそうな、大げさな息継ぎのクロールです。

ただなぜか挑戦心だけは子どもの頃からありました。

25 メートル泳げない子が大半の中、勇気をもって 25 メートルをターン。するとターンする度に歓声が上がります。そりゃあ泳いでいるのか？溺れているのか？見分けのつかない動きですからね。見てる方もハラハラしたことでしょう(笑)。

そして最後 100 メートル泳ぎ切ると、すごい歓声と拍手が巻き起こったのです。

僕は自分が泳ぎ切った達成感よりも、自分のことで沢山の人がこんなに喜ぶ姿が不思議でした。そして僕はプールサイドに上がって肩で何度も息をしていたこと、空がとても青かったこと、父がとても誇らし気にその夜、誉めてくれたことを息子に話しました。

結果、学年で 100 メートル泳いだのは 2 人だけで、もう一人はシノハラ君。

彼はカッコいいフォームで悠々と 100 メートルを泳ぎ切ったのです。それはまるでオリンピック選手のように美しく見えたものです。回りの反応も全然違いました。「息を呑む」という表現がまさにピッタリ。スゴイものを見ると人は黙るのですね。泳ぎ切ったあとの拍手もクラシックの音楽会で聞くよう爽やかな拍手でした。

さて、私が受講したセミナー講師によると、10 歳までの間に経験した「嬉しかったこと、楽しかったこと」はその後の人生に大きく影響を及ぼすと習いました。それは些細なもので良いそうです。その時の「プチ成功体験」で得た「感情」を追い求めて行動することが、成功のカギとなるのだという話でした。

私が遅くてもマラソンや 110 キロウォークに挑戦したのも、それを追体験したかったのかもしれない。水泳大会の記憶は、不格好でも「自分はこれでいいのだ」と思わせてくれます。